Sirai

12 2007 Dec.

支　部　便　り

みつわ会東北支部

大隈像の目線に散りし銀杏かな　　圭舟

早稲田のキャンパスから見る銀杏の更にその先に、大隈重信さんは今の世情をどの様に見ているのであろうか。

１２月の行事

	みつわ会	みちのく損保
１２月　６日（木）		幹事会・忘年会
１１日（火）	忘年会（下記）	

１２月の二水会と幹事会はお休みです。

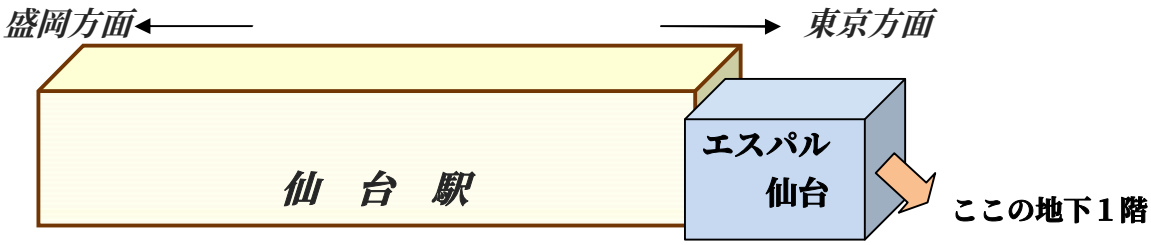
１９年度ゴルフ部会、みつわ会、二水会合同忘年会

・日時：１２月１１日（火）５時～
・会場：飯・魚・酒・肴「松　島」（右写真）
　　仙台駅　エスパル地下１階　Tel 022-267-4088
　　仙台市青葉区中央１－１－１
・会費：５０００円　（女性会員３５００円）
※参加の連絡は、１２月７日（金）までに木村さんか、友彦さんまでお願いします。
（木村さん）２２７－２１３１東北事業本部
（友彦さん）３７９－５２８７自宅

松　島

※恒例により、反省と抱負を一人３分位のメドでスピーチをお願いします。反省も抱負も無い方は、近況とか長生きの心得とか、何でもいいので聞かせて下され。

案内図「此処だ」



１１月１４日に逝去されました高橋末吉様の奥様米様（８６歳）のご冥福をお祈り申しあげます

――― 土井晩翠のデスマスク ―――　　千葉繁明

青葉通りにひっそりと

仙台に住んでいながら、一度も中に入って見たことがなかった、晩翠草堂を訪れる機会があった。戦災で住居と蔵書を失った晩翠の為に、教え子など市民有志が中心となり、昭和 24 年に旧居跡に建設、晩翠は昭和 27 年に満 80 歳で亡くなるまでの数年をここで過ごした簡素な建物である。中に入ってみると、詩人として文化勲章を受章し、荒城の月を作詞した晩翠のイメージからは程遠く、あまりにも侘びしさが漂う住まいである。

特に部屋の真ん中に晩翠が寝ていた鉄製のベッドがひとつ置かれているのが印象に残った。

「鉄枠のベッドひとつ置かれおりあまりに侘びしき晩翠草堂」

ある日、毎週水曜日に通っている絵画教室のあと、皆でお茶を飲みながら、なんとなく晩翠草堂の話になった。絵画教室の浅井講師が学生の頃、晩翠草堂の夜警のアルバイトをしていたという話から、私が先日訪れた晩翠草堂の話になったのである。其の時、教室の仲間の一人が、新聞記者の駆け出しの頃、土井晩翠が亡くなったという知らせで、カメラの機材を担いで取材に行ったという話になった。其の時目にしたのが、白衣を着た数人の人達が晩翠の遺体からデスマスクを採っている場面で、報道の立場から駆けつけた晩翠草堂の中でショッキングな光景を目にしたわけである。日本芸術院会員、仙台市名誉市民、文化勲章受章者であることから、デスマスクを残そうと言うことで、急遽デスマスクの作成をしている所に、報道の立場で立ち会ったということである。其の時も、部屋の中の鉄製のベッドが印象に残ったという話から、私が見た鉄製のベッドの印象に話がつながったという、秋の夜長の随想である。

土井晩翠は昭和 27 年 10 月 19 日午後 9 時 25 分逝去とある。又、其の時のデスマスクは今でも晩翠草堂に飾られて訪れる人達に晩翠の面影を忍ばせているのである。

ドイツ人との交流　　星　利夫

（前　篇）

自宅から１０分もかからない所にある八木山小学校とカトリック幼稚園でのカール・スルーエ合唱団のコンサートに参加してほしいとのお話があったのは昨年、お向かいのＥさんからであった。お嬢さんは芸大出の作曲家兼ピアニスト、そのご主人も同大出身の作曲家兼バリトン歌手で、ドイツではカール・スルーエ市（バーデン＝ウ”ユルテンブルグ州の主要都市、人口２８万）を、日本では、東京、横浜、仙台を根拠地として活躍している若手の音楽家である。二人が主宰するカール・スルーエ混声合唱団の仙台コンサートへの参加協力である。はじめは、専門家集団では、との思いから躊躇があったが、団員は色々な職業、主婦などというノンプロ・コーラスということが分かり、またお向かいの熱心さにも動かされて参加することになった。もっとも、あとで分かったことだが、日本人のソロ及び女声パートの主要メンバーは、音楽大出の若いエキスパートであり、声も豊かでドイツ語の歌詞はテンポの早い曲でも十分に唄いこなすプロであった。

いずれにせよ、独日協会合唱団「デア・フリューゲル」に参加することになり、限られた練習ではあったが、テンポの早いドイツ語の曲以外は楽しんで歌うことが出来た。

小学校での演奏会、そしてカソリック幼稚園での一般コンサートは他の合唱演奏会とは違って、着物姿のステージでもあり、何よりも伸び伸びと歌うことをモットーにした指揮・指導のもと聴衆もリラックスして楽しいものになった。

ドイツ人との交流は、演奏会ばかりでなく、その上ドイツ人のホームステイにつながった。多少なりともボランテイアの仕事に携わっていることもあり受入れの意思表示をしてきたが、そのうちに希望が聞かれ、奥さんが日本人のご夫婦に決めた。ドイツ語は辞書片手に短文を読むのはともかく、日常会話はどうしようもない。これは正解で、気兼ねなくドイツ人との初めての交流を楽しむことが出来た。その短い滞在の間に興味をもって見たことを二，三ご紹介します。

ホームステイ第一夜の翌朝、ドアを開けて外に出ると、大きな身体を斜めにしたライアンさん（ご主人）は、カメラを様々に持ち替えて、どうも白百合に焦点を合わせているのが目に入った。そして私へともなく「シエーネ（美しい）」と言う。百合がきれいでしょうと返すと、「ナイン（ノー）」という。近付いて指し示すのを見ると、花びらの中には大小不揃いの朝露が宝石のように輝いているではありませんか。

朝明けの真蒼（まさお）に高き白百合の
花奥（かおう）の露に魅入らるごとし

今年の百合、カサブランカは、大輪の花を次々に咲かせて、その美しさは喩えようもなく、庭の楽しみにしていたものの、花の中に透明に輝く露を見たのは初めてで、ライアン氏の繊細な審美感のお陰であった。

滞在中、釜石演奏会前日、フリーとなり、何処へ行こうかということになり、ライアンさん夫妻の意向を聞くと、森に行きたいという。

仙台は杜の都というものの、ドイツの森のイメージは、日本の森とは違う。行ったことはないが、旅行雑誌のグラビアなどで見たことがあり、ドイツの森は、シュバル

ツバルト（黒い森）といって、平地に針葉樹の大木が欝蒼と茂っている。カール・スルーエ市の周囲はそのシュバルツバルトとのこと。

仙台は杜の都と言いつれど
森はいずこやシュバルツバルト

海は近いのですかとの夫人の問いに救われる。５０分位と回答するや松島に決まる。ドイツは海岸線が短い。海への行楽は、ドイツで人気があり、ライアンさんも乗り気である。松島海岸駅に着き、まず瑞巌寺である。中門、御成門に至るまで時代を重ねた杉の巨木が立っている。その偉容に血が騒ぐのか、わが意を得たりの表情。ライアンさんは「森です」と私を振り返る。方丈の総欄間は、極彩色の鶴の巣篭り、牡丹に孔雀の彫刻が施されているのをカメラに収めるが、庭の植樹により関心がある模様。樹木の名前を聞かれるが知らないのが多い。そして苦行僧の修行にも使われた洞窟を子細に見て写真に撮る。この境内は、お気に召した様で、帰途にまた立ち寄る。

中門をいま一度とくぐりしは
瑞巌寺にこそ森の息吹を

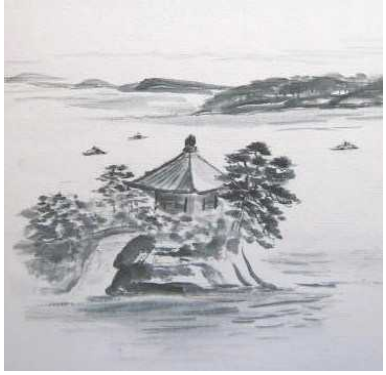
福浦自然植物公園をと福浦橋を渡る。島の中ほどを過ぎた所にある弁財天にお参りをして、ちょうど昼時でもあり近くの茶店風の休み場所で蕎麦をすする。しばらくして島の南端まで足を伸ばす。ライアンさんは海底を覗き込んだりしているが、波にゆらいでいる海藻を、また波に浸食を受けた海中の岩に興味を持ったらしく、撮影している。戻ることになり橋に向かって歩いているうちに、ふと気がつくとライアンさんがいない。振り返るとかなり後ろの杉林の一角で、背を伸ばして何かを撮っている姿が見える。とって返してライアンさんのそばに立つと、太い杉の木の背丈くらいのところを撮っている。そこには、若い木と草木が生えている。どうも太い枝が切られて何年かの後に、その痕に苔が自然に生えたのでしょう。そこにどこからか種子が飛んできて育ち、杉そのものから自生したかのようにひっそりと道行く人を見てきたのでしょう。ライアンさんは、奇有の生の有り様を、様々なアングルから写真に収めるのに熱中していたが、良く気がついたものと感心する。前後左右を見ながらゆっくり散策してはじめて発見出来る。私の様なせっかちな者には発見出来ない。やはり森の民であり、森を見に行きたいという願望は、私達とは違う。ライアン氏は建築（装飾）デザイナーとの夫人の言葉が思い出された。

福浦の枝の片陰枝の痕の
苔に生きん小さき花と木

紅葉には少し早い松島なので、道々気をつけてはきたものの見つからず、もう諦めようと最後に五大堂を見て帰ろうとしていた矢先、五大堂を回りきる最後の壁に懸かる枝先が、紅葉しはじめて白壁に映える。ライアンさんの粘り勝ちである。そのさま、欣喜雀躍そのもの。

五大堂廻り終えんに薄紅葉

電車の待ち時間は、思わぬ楽しい・・・
で、この続きは１月支部便りで。



Sirai